氏　　名	：	新海　晃
専攻分野の名称	：	博士（教育学）
学 位 記 番 号	：	博甲第 341 号
学位授与年月日	：	令和２年３月１７日
学位授与の要件	：	学位規則第４条第１項該当　課程博士
学 位 論 文 名	：	聴覚障害児の文章産出に関する研究－文章産出過程モデルに基づく検討－
論文審査委員	：	（主査）　教授　澤　隆史 （副査）　教授　齋藤　ひろみ　　教授　葉石　光一 教授　渡部　匡隆　　教授　濵田　豊彦

学 位 論 文 要 旨

幼少期より聴覚を活用した音声入力に制限が生じる聴覚障害児では、言語発達上の遅れや課題が現れやすい。その影響は書記言語の読み書きにも及び、聴覚障害児の多くは書くことに困難を有している。特に、文章を書くことの困難が多様な側面に現れるため、文章を書く力の理解や支援に向けて、聴覚障害児の文章産出の実態を明らかにする必要がある。そこで本論文では、聴覚障害児の文章産出の特徴について検討を行った。

第１章から第５章では、本研究の背景を述べるとともに、従来の研究を概観した。その上で聴覚障害児の文章産出の特徴を明らかにするためには、書かれた文章を分析の対象とした作文評価や言語分析などのテキストベースの検討と、書く行為そのものに焦点を当てたプロセスベースの検討が必要であることを論じた。さらに、文章産出過程に関する理論的モデルを用いることが有益であることを指摘した。以上を踏まえ、本研究では、文章産出の過程に関するモデルの枠組みに基づいて、テキストベースおよびプロセスベースからの作文の分析を行い、聴覚障害児の文章産出の特徴について明らかにすることを目的とした。

第６章では、テキストベースの検討に先立ち、聴覚障害児の書いた作文を評価する観点について検討した。全国の聾学校教員を対象に、聴覚障害児の作文の評価観点の重要度に関する質問紙調査を実施した。その結果、聴覚障害児の作文評価には７つの主たる評価観点があること、各評価観点の重要度は年齢段階で異なるものの、教員経験年数には影響されないことが明らかとなり、評価観点の妥当性が確認された。

第７章では、第６章で明らかとなった７つの評価観点を用いた作文評価を実施し、その有効性や客観性について検証した。聾学校に在籍する小学部高学年と中学部の聴覚障害児が書いた自由作文各 24 編を対象に、それぞれの学部の聾学校教員各 10 名が７つの評価観点と総合評価の計８つの観点を用いた印書評定法による作文評価を実施した。また、48 の言語要素による言語分析を実施し作文評価との関連について検討するとともに、大学生による評価との比較を行った。分析の結果、７つの評価観点は作文力を網羅する観点であることが示された。また、言語要素の使用傾向と作文評価との間に一定の対応関係があること、聾学校教員の評価は大学生の評価と類似す

ることが明らかとなり、評価観点の客観性が確認された。

第８章では、聴覚障害児が書いた説明文を対象に、作文評価と言語情報との関連について検討した。聾学校に在籍する中学部および高等部生徒計133名を対象に、手続き的説明文に関する２種類の作文課題を実施した。そして、11の評価観点と総合評価による作文評価と、言語要素と記述内容に関する分析を実施した。その結果、説明文の目的に応じた評価観点が重視されることが明らかとなった。また、文法や単語表記の誤りが作文評価と強く関連すること、言語要素の使用傾向から推定される文章構造が作文評価と一定の関係にあること、評価の高低と内容量とに明確な関係性は認められないことが示された。

第９章では、聴覚障害児が書いた論証的文章を対象に、作文評価と言語情報との関連について検討した。聾学校に在籍する中学部および高等部生徒計122名を対象に、意見文ならびに説得文に関する３種類の作文課題を実施した。そして、11の評価観点と総合評価による作文評価と、言語要素と記述内容に関する分析を実施した。その結果、論証的文章の目的に応じた評価観点が重視される傾向が示された。また、学部および課題ごとに作文評価に対して影響が大きい言語要素があること、ほとんどの課題で言語要素の使用傾向から推定される文章構造が作文評価と一定の関係にあること、課題ごとに評価の高低と記述内容との対応関係が認められることが明らかとなった。

第10章では、プロセスベースの検討として、聴覚障害児の文章産出プロセスについて検討した。対象児は、聾学校に在籍する中学部および高等部生徒計36名であった。第１節では、文章産出プロセスの心的操作に関わる認知的能力について検討した。認知的課題を実施した結果、年齢相応の作文スキーマを習得していることが示唆された。第２節では、聴覚障害児の文章産出時の筆記行動を観察し、ポーズの継続時間や出現頻度を分析することで、文章産出におけるポーズとそのプロセスの特徴について検討した。その結果、プランの立て方は健聴児と同様であることが示唆された。一方、健聴児に比してポーズの継続時間は長く、またその頻度も多いことが明らかとなった。これらの結果を踏まえ、聴覚障害児の文章産出の困難が文中のポーズ後の行動やポーズの長さに反映されることを指摘した。

第 11 章は総合考察である。第６章から第 10 章までの結果を踏まえ、聴覚障害児の書いた作文の評価方法（第１節）、テキストベースからみた聴覚障害児の文章産出の特徴（第２節）、プロセスベースからみた聴覚障害児の文章産出の特徴（第３節）について考察した。その上で、聴覚障害児の文章産出プロセスのモデル化について、聴覚障害児に特有のプロセスが存在することを指摘し（第４節）、今後の課題について論じた（第 12 章）。